姜白石詞序說

村上哲見

はじめに

清朝初期、詞學隆昌の氣運の中に在って、浙西詞派の開山といわれる朱彝尊は、北宋以前の小令をよろこぶ從來の風潮に對して、南宋の詞を範とすべきことを提唱し、特に姜夔（白石）を究極の理想のごとくに推稱した。

○世人の詞を言うや、必ず北宋を稱す。然れども詞は南宋に至りて始めて其の工を極め、宋季に至りて始めて其の變を極む。姜堯章（夔）氏最も傑出爲り。[1]（「詞綜」發凡）

○詞は姜夔より善きは莫し。之を宗とする者、張輯、盧祖皋、史達祖、吳文英、蔣捷、王沂孫、張炎、周密、陳允平、張翥、楊基、みな夔の一體を具う。[2]（「黑嶧齋詩餘序」、「曝書亭集」四〇）

當時の詞壇における朱彝尊の地位からいって、これらの發言は大きな影響力をもったに違いない。しかし一世紀餘りの後、浙西詞派に對抗する常州詞派の領袖となった周濟は、宋の代表的詞人として周邦彥、辛棄疾、王沂孫、吳文英の「四家」を列し、姜夔に對しては、辛棄疾の「附庸」[3]という地位しか與えなかった。

○塗を碧山（王沂孫）に問い、夢窓（吳文英）・稼軒（辛棄疾）を歷て、以て清眞（周邦彥）の渾化に還る。余の世の詞人爲る者に望む所は蓋し此の如し。[4]（「宋四家詞選」目錄序論）

○われ十年來白石を服膺し、稼軒を以て外道と爲せしも、今よりして之を思わば瞽人籥を捫と謂うべし。稼軒は鬱勃、故に情深し、白石は放曠、故に情淺し。稼軒は縱橫、故に才大なり。白石は局促、故に才小なり。[5]（「介存齋論詞雜著」）

周濟の場合、四家を列するといっても、究極の目標は右にみるように周邦彥である。このように詞の理想的なすがたを姜夔に求めるか、周邦彥に求めるかという對立は、內容はかなり違うけれども、宋末の沈義父と張炎の間にすでに見られたところである。沈義父の「樂府指迷」では周邦彥を至高とし、姜夔に對してはやや批判的であるのに對し、張炎の「詞源」ではその逆の見解が述べられている。[6]なおさきの朱彝尊の主張は、張炎の影響をかなり強く受けているものと考えられる。

いずれにせよ、姜夔という詞人をどのように位置づけるかという問題は、詞論というものが興りはじめた當初から、詞學隆盛期の清朝に到るまで、常に詞論の焦點のひとつになっていたことは確かである。詞論（または詩論）において、誰をどのように位置づけるかは、その

作者をどのようにとらえるかという個別的な問題にとどまらず、その様式の本質およびその歴史的展開をどのように把握するかという、様式論および文學史研究の中心的課題と深くかかわることがある。姜夔をめぐる諸家の議論は、まさにそのような意味をもつものと思う。

一

近代における詞學の宗師、龍沐勛氏はいう、

○蘇軾と柳永と道を分ち鑣を揚げてより、詞家に遂に「別派」・「當行」の目有り。後來更に「婉約」・「豪放」の二派に分ち、「婉約」なる者を認めて正宗と爲す。[7]（「中国韻文史」）

右の論はやや單純化しすぎるきらいはあるし、また明の張綖にはじまるという「婉約・豪放」[8]という呼び方が適當かどうかなどの問題を含んではいるが、宋詞の展開の中に、二つの異った流れがあるという大筋は誰しも否定し得ないであろう。ただしその内容は具體的に、また詳細に檢討されねばなるまい。

右の文中にみえる「當行」なる語は、詩について例の「滄浪詩話」に「惟だ悟るのみ、乃ち當行爲り、乃ち本色爲り」[9]という有名な一節があるが、詞についても宋人の評に時折り見られる。

○無咎（晁補之）云う、……黄魯直（庭堅）間小詞を爲る。固より高妙なり。然れども是れ當行家の語ならず。乃ち腔子に著して好詞を唱うなり。[10]（趙令畤「侯鯖錄」）

つぎに擧げる蘇軾に對する「本色に非ず」の評の「本色」も、ほぼ同義かと思われる。

○退之（韓愈）は文を以て詩を爲り、子瞻（蘇軾）は詩を以て詞を爲る。敎坊の雷大使の舞の如く、天下の工を極むと雖も、要は本色に非ず。[11]（陳師道「後山詩話」）

右の二條における評は、「不是當行家」もしくは「要非本色」とはいっても、單純な貶辭ではなく、それぞれ「固高妙」、「極天下之工」といった高い評價と混在しているところが興味深い。おそらく、文學として非常にすぐれたものを持ってはいるのだけれども、詞としては本筋ではない、というような意味で、詞というものが、文學として特殊な分野であるという認識が示されていると思う。

右の二條は主として文學的性格について述べられているのであろうけれども、詞はもともと歌辭であるから、音樂との關係でいえばこの當行、本色ということについて更に明確な差があったと思われるし、右の二條も、そのことと無關係ではないと思う。

詞人が音樂にどのくらい通じているか、いないかは、相當に個人差があったはずであり、かつての拙論「吳文英（夢窓）とその詞」[12]において、この問題に觸れたことがある。その一節を擧げておく。

○……宋代の詞の作者のすべてが、音樂に通じた上で作っているわけではない。だからこの面からいうと、宋代の詞人には、單に句法、押韻、平仄などを按じて作詞し、歌うことは樂工にまかせるというような人と、みずから音樂にも通じ、微妙なところまで樂曲に合せて詞を作る人との二種があったといえる。後者は專門家的詞人であり、前者はいわばしろうとの旦那藝のようなものと解してよいであろう。

そして誰がどの程度音樂に通じていたかということは、今となっては具體的に知ることはできないが、みずから作曲もしたということが檢證される人は、相當に通曉していたと考えてよいであろう。そうなると姜夔は詞集（「白石道人歌曲」）六卷のうちの二卷（第五・六卷）は

自度曲、自製曲としるされて旁譜を存することで有名であるし、また譜は存しないけれども、吳文英には前書きに曲も自作であることをしるすもの、友人の唱和の作に吳文英の作曲であることをしるすものがあって、しばしば作曲もしたことが證される。これらの詞人と、「近世の詞を作る者、音樂を曉らず、乃ち故らに豪放不羈の語を爲す」(14)(「樂府指迷」)と評されるような人々とは、かなり明確な差があったに違いない。

つぎにもうひとつ、宋詞における二つの異った流れという場合、南宋においては詞人の社會的な地位について、かなり違った二種があることにも留意すべきである。それは、官僚として相當な地位について活動した人々、いわゆる官僚文人に屬する人々と、官職とはほとんど無緣で、もっぱら文事、今でいう文學藝術方面での活動によって名聲を得ていた人々、官僚文人に對しては專業的文人とでもいうべき人々とである。前者の例としては辛棄疾・陸游・劉克莊などが擧げられ、後者の例としてはさきの姜夔・吳文英などを擧げることができる。そしてその違いは、さきの音樂の素養における差と密接にかかわっているであろうし、更に龍沐勛氏のいう、詞風における「別派・當行」の違いと關連するであろうことも容易に類推し得る。もうひとつの「婉約・豪放」の說は、のちに述べるようないろいろな問題があって、そのまま受け入れるわけにはいかないけれども、そうした對立をも含み得る兩樣の詞風があって、それが詞人たちの階層的性格の違いと深くかかわっているということは、かなりな確度をもっていえると思う。

ところでこのように二種類の文人階層を想定した上で、それぞれの歷史的由來を考えてみると、官僚文人の方は北宋以來の傳統的な存在と考えてよい。つまり北宋の官僚文人、たとえば蘇軾・黃庭堅などと、南宋の陸游・劉克莊などを比べて、階層としての質的な違いを指摘することは難かしい。ところが專業的文人、つまり詩文のみならず、書畫音樂などにもすぐれ、一方官職とはほとんど無緣で、もっぱら文學や藝術方面の活動で社會的にそれなりの地位を占める人々というのは、北宋以前ではほとんど見出し難い。單に非官僚文人ということでいえば、たとえば林逋(和靖)のような、いわゆる隱者の系列に屬する人がいるが、ここでいう專業的文人は決して隱者ではない。むしろ社交界において積極的に活動することによって名聲を得、無官であるだけにかえって權貴の人々とも對等に友人として交わり、社會的にも重んじられる、そういった存在なのである、おもうに、この種の人間類型は、南宋になってはじめて登場したと考えてよいであろう。おそらく、宋代になって文學、藝術など、中國の傳統的文化の最も高度な部分がひたすらに洗練を極め、南宋に至って爛熟の段階に達した結果、こうした特殊な階層を生むことになったのである。南宋の中でも姜夔はその最も早い時期に屬し、吳文英・周密などがこれに續く。更に周密の編する「絕妙好詞」(後出)に名を連ねる詞人たちの中には、この種の文人が少なくないように思われ、一種の階層を形成していたことが窺われる。そして後世、明・清時代においては、傳統的な階層のひとつとして受け繼がれて行くことになる。このように歷史的に通觀してみるならば、姜夔こそはこの種の人間類型の最初のきわだった存在といえるであろう。(15)

二

ここで姜夔の生涯と著述について概觀しておこう。姜夔、字は堯章、白石道人と號した。清朝から中華民國時代の詞に關する論述にお

いて、しばしば「石帚」としるされるが、吳文英の詞の前書きに時折り登場する「姜石帚」は別人で、[16] 朱彝尊あたりから混同されたらしい。[17] 無官の人の常として傳記資料に乏しく、生卒年も明らかでないが、夏承燾氏の「姜白石繫年」では、生年を紹興二十五年（一一五五）、卒年を嘉定十四年（一二二一）頃と推定する。番陽（江西省波陽）の人。父噩は紹興三十年（一一六〇）の進士、漢陽（湖北省武漢）の知縣となって任地に卒した。姜夔はなお幼く、この地に嫁した姉のもとに身を寄せた。のちにみずから回想して「夔　蚤歲より孤貧」（「昔遊」詩の序）あるいは「某　早に孤にして不振」（周密「齊東野語」引「姜堯章自敍」）などと述べているが、そのような境遇に在って、のちに無官のまま人々に重んじられるような文學、藝術の造詣をどのようにして身につけたのであろうか。興味を惹かれる問題であるが、いっさい不明である。

白石が世に知られるようになったのは蕭德藻（千巖）の推挽による。この人は後世に僅かな詩を殘すだけであまり知られないが、當時は陸游・范成大・楊萬里・尤袤らとともに官僚にして詩人として有名で、楊萬里の詩文の中でしばしば「尤・蕭・范・陸」と並稱されている。[18]

この蕭德藻が姜夔に會い、「四十年詩を作りしも、始めて此の友を得たり」[19a] と激賞し、兄の娘と結婚させた。やがて姜夔は蕭德藻に伴われて江南に移り住むことになり、湖州・杭州・蘇州・無錫・吳江・松江・紹興などの各地を往來し、當時の名士たちの知遇を得た。姜夔と交遊のあった人々の名を擧げるならば、すでにみえた蕭・楊・尤・范・陸のほか、樓鑰、葉適、京鏜、謝深甫、朱熹、辛棄疾などがおり、宰相、執政に到った人も少なくない。中でも張鎡、張鑑とは深いかかわりがあった。この二人は南宋再建の功臣、循王張俊の曾孫に當る。張俊の子孫は南宋一代を通じて富裕の名家として繁榮した。張鎡の杭州における壯大な邸宅と、そこでの豪侈を極めた生活については、周密の「武林舊事」や「齊東野語」に詳しい記述がある。張鑑は張鎡ほどに有名ではないが、その兄弟行の人に違いなく、長期にわたって姜夔の生活の面倒をみたらしい。[19b] さきに擧げた「詞源」の著者張炎は、張鎡の曾孫に當る人で、その姜夔に對する崇敬の情は、姜夔と張氏一族の深い因緣と無關係ではあるまい。

そのほか姜夔の事蹟の顯著なものとしては、慶元三年（一一九七）、雅樂を論じて「大樂議」一卷、「琴瑟考古圖」一卷を獻上したが、其の能を嫉まれて採り上げられなかった。「大樂議」の概要は「宋史一三一、樂志六」に記錄されている。また慶元五年、「聖宋鐃歌鼓吹曲」十四篇を獻上し「免解」、解試免除となって禮部試に應じたが及第しなかった。この二事は、白石が音樂に格別の造詣を有したことを證するとともに、官位に對して全く無關心ではなかったことを示しているであろう。しかしいずれも不首尾に終ったまま深く追い求めた痕跡はなく、やはり恬淡たるものであったことを思わせる。[20]

けっきょく官職とは無緣のまま生涯を終えることになるが、それにしてはさきにしるしたように交游關係の豪華さは異常ともいえるほどで、北宋以前ではほとんど考えられない現象である。先述のように南宋になって初めて生じた新しい人間類型と稱する所以であり、中國社會の文化面における新しい情況が生み出したものと考えられる。

姜夔は詞集以外にも詩集、詩論、更に書法に關する著述二種（「絳帖平」、「續書譜」）が存しており、文人としての幅廣い活動の跡をとどめているが、今は立ち入らないことにする。

詞集はその生前にすでに出版されていたが早く失われ、乾隆年間にそれを寫した抄本が再發見されて評判となり、いろいろなかたちで流布することになる。その景宋抄本が世に出る以前に何種かの輯本が作られているが、今となっては歴史的價値しかない。その主なもの二種を擧げておく。

○毛晉編「白石詞」一卷、汲古閣刊「宋名家詞」の一。黄昇編「中興以來絶妙詞選（花菴詞選）」に收める三十四首を抽出して一卷としたもの。

○陳撰編「白石詞集」一卷（「詩集」と合刊）。康熙五十七年（一七一八）廣陵書局刊本。なお雍正五年（一七二七）洪正治序印本があり、往々にして雍正五年刊本として書目に著錄されているが、[21]實は陳撰刊本の序跋を替えて付印したものである。

つぎに宋本の系統であるが、その祖本、嘉泰二年（一二〇二）雲間錢希武刊本「白石道人歌曲」は、姜夔生存中の刊行というばかりでなく、彼自身の編定に成るか、もしくはそれに近いものと考えられている。錢希武という人は未詳だが、錢氏は雲間（松江）の名族で、廣大な邸宅と有名な庭園を有していた。[22]姜夔にはこの庭園を詠じた詩詞があって、[23]この家との淺からぬ因緣が示され、おそらく寄留していた時期があったに違いない。

この宋本自體は早くに失われ、清朝の初め、康熙年間には朱彝尊をして「惜しいかな、白石樂府五卷（おそらく「直齋書錄解題」に據る）、今僅かに二十餘闋を存するのみ」[24]と歎かせているが、その後、雲間の人、樓儼（敬思）がこの本の刊記を存する元の陶宗儀抄本を購得して評判となり、雍正乾隆の間に何種かの轉抄本が作られ、その後それらをもとに各種の刊本が生まれた。

○夏承燾「姜白石詞編年箋校」附「版本考」、一九五八年、中華書局。

○丘瓊蓀「白石道人歌曲通考」中の「版本考辨」、一九五九年、音樂出版社。

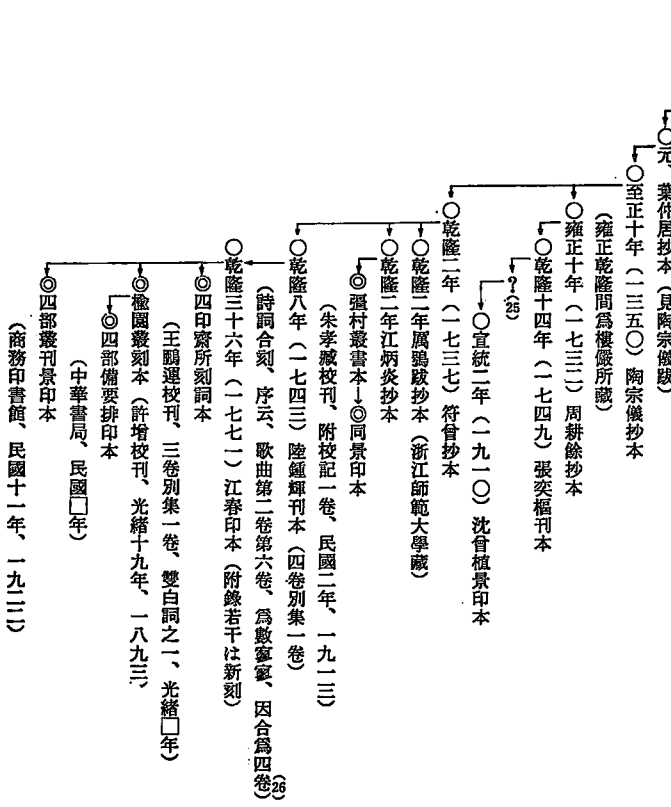
に各本の解題があってほぼ盡くされているが、兩者ともに記述が錯雜していて、どの本がどのような位置にあるかをにわかには知り難い。そこで諸本のうちの主要なものについて、その間の脈絡を圖にして示しておく（別掲系統圖）。

けつきよく抄本を別にすれば、(1)陸鍾輝刊本または四部叢刊景印本、(2)彊村叢書本、(3)張奕樞刊本または沈曾植景印本の三種が基本テクストとして重要と考えられるが、殘念なことに(3)の張本沈本とも日本では容易に見られず、筆者は未見である。ただし文字については彊村本に附する校記、旁譜については前掲丘氏「歌曲通考」中の「宮譜考訂」によって異同を窺うことはできる。なお唐圭璋氏編「全宋詞」（一九六五年修訂本）では、彊村叢書所收の六卷別集一卷を底本とする八十四首に、前掲の洪正治本（實は陳撰刊本）にみえる出處不明の三首を加えて八十七首を錄する。但し末三首には「姑らく此に附す」と注記がある。

三

宋詞を論ずるに當って、蘇軾と辛棄疾とを一括して「蘇辛」と呼ぶことは、由來も古く、普遍的に通行している。ただしそれを豪放派と呼ぶのは、かつて吳世昌教授が力說されたように適切ではあるまい。吳教授の主張される、蘇軾を含めて、北宋に豪放派無しの說は、相當の說得力を認めざるを得ないからである。[27]とはいえ蘇詞と辛詞との間に一脈相通ずるものがあることは、やはり否定することはできない。

「白石道人歌曲」諸本系統圖（◎は筆者が實見し得たもの）



辛棄疾の門人と稱する范開の「稼軒詞の序」には

○世に言う〝稼軒居士辛公の詞は東坡に似たり〟と。坡を學ぶに意有るに非ず、其の蓄うる所に發する者より之を言わば、則ち坡若ならざる能わざるなり。(28)

とある。この一文は、辛棄疾がことさらに蘇軾を學ぼうとしたのではないことを傳えるとともに、おのずから共通するものがあること、およびそのことが當時ひろく知られていたことを示している。この「稼軒詞（甲集）」は、辛棄疾自身が編定にかかわったとみなされるもので、(29)ということは、門人范開の述べるところは、ほとんど辛棄疾の自覺するところでもあったと考えてよいであろう。

この「蘇辛」に對して、やはり北宋南宋を貫くもう一つの系列として、北宋末の周邦彥の後を承ける姜夔、吳文英らを對置するというのがひとつの常識のようになっている。たとえば從來概說書として定評のある龍沐勛「中國韻文史」や薛勵若「宋詞通論」など、南宋の詞に關してはみな右の二系列を軸として說かれているし、(30)近年では劉揚忠氏の「宋詞研究之路」(31)は從來の宋詞研究を概觀する「第三章、對于宋詞一些代表作家的研究和爭論」において、「第四節、關于辛棄疾及辛派詞人」、「第五節、關于姜夔・吳文英及所謂〝格律派〟」という風にまとめている。ただ吳熊和氏の「唐宋詞通論」が、「第四章、詞派」において、辛棄疾、姜夔、吳文英をそれぞれ別立ての一節としているのは注目すべきであるが、(32)三者の關係を詳論することはしていない。

先述のように、南宋の詞人を社會的階層の違いから官僚文人と專業的文人の二系列に分けるならば、姜夔と吳文英はともに後者に屬するに違いないし、かつその詞が北宋末の周邦彥の成就を基盤としていることも共通する。從來の通說において、辛棄疾に對する姜、吳という

風に位置づけたのもその故であろう。しかしながら、ともに周邦彦の後を承けるといっても、姜と吳とではその繼承のしかたが違うことにも留意しなければならぬ。この問題は、南宋の詞を理解するひとつの關鍵であると思うので、以下この問題を中心に考察を進めたい。

周邦彦の詞に對する總括的な評語であり、またその特色をよく示していることばとして、「渾厚」の一語があることはよく知られていよう。彼の詞が尊崇されるのも、この「渾厚」という境界を重んずるからにほかならない。

○清眞の詞は、其の意澹遠、其の氣渾厚、其の音節また清妍和雅にして、最も詞家の正宗爲り。[33]（戈載「宋七家詞選序」）

○……之を兩宋に求むれば、ただ片玉（周邦彦）、梅溪（史達祖）のみ以て之を備うるに足る。周の史に勝れるは、則ちまた渾の一字に在り。詞は渾に至りて、また進むべき無し。[34]（馮煦「宋六十一家詞選例言」）

このように周邦彦の詞が「渾」、「渾厚」なればこそ最高であるという議論は、決してこの二例にとどまらない。この「渾」の字は、渾沌なる語が示すように、もともと茫漠として見分ち難いことをいうのであり、事實、周邦彦の詞、特に名作として稱揚されるような作品は、概ね一讀して明白という種類のものではない。たとえば代表作として有名な「蘭陵王[35]」は「柳」と題されていて、

柳の陰は直く
煙の裏に絲絲は碧を弄ぶ
とみごとな描寫からはじまるものの、第二段に入るや
閑かに舊き跡を尋ぬるに
又　酒は哀絃を趁い
燈は離席を照らす
梨の花　榆の火　寒食を催す
愁うるは一箭の風快く
半篙の波は暖かくして
頭を回らせば迢遞として便ち數驛なる
人の天北に在るを望むならん

と、いつのまにか柳は捨象されてしまい、「驟かに之を視れば、幾ど用筆の意を測る莫し」[36]（吳梅）、もしくは「人をして遽かには其の旨を窺う能わざらしむ」[37]（陳廷焯）ということになる。ただしそれはある種の現代詩などにみられるように、脈絡もなくことばを並べるのとは違って、たとえば陳廷焯は右に引いた一節のあとに

○たいてい美成の詞は、一篇にみな一篇の旨有り。其の旨を尋ね得れば、刃を迎えて解くに難からず。否らずんば則ち其の繁碎重複に病しまん。何ぞ以て清眞を知るに足らんや。[37]

と述べる。この「蘭陵王」の詞は、陳洵のいう「柳に託して興を寄す、柳を詠ずるには非るなり[38]」の語や、周濟の說く「客中に客を送る」また「一愁字もて、行者に代りて想を說く[39]」などを參照しつつ讀めば、敍述の脈絡が見えてくると思うがそれにしても「沈鬱頓挫」（吳梅「詞學通論」）もしくは「廻環往復」（夏敬觀手評「樂章集」）などと評される周邦彦の筆致を味わうには相當の修練を要するであろう。[40]

この周邦彦の「渾」と、いわゆる「蘇辛」らの詞との違いは極めて明白である。辛棄疾の名句

壯歲　旌旗もて萬夫を擁し
錦襜の突騎　江を渡りし初め[41]（「鷓鴣天」）

などにあふれる慷慨の氣は周邦彦の詞風とは到底相容れないものであ

るし、また表現手法においても、

牀を繞る飢えし鼠
蝙蝠は燈に翻りて舞う
屋上の松風　急雨を吹き
破紙　窓間に自ら語る[42]（「清平楽」）

のようなリアルな表現は、周詞の「渾」とはおよそ質を異にする。それは蘇軾のたとえば、

酒に困れ路は長く　惟だ眠らんと欲す
日高くして人は渇き　漫ろに茶を思う
門を敲いて試みに問わん　野人の家[43]（「浣溪沙」）

にみられるような現實の體驗をありのままに描き出す手法に通ずる。さきに吳世昌教授の豪放派否定說を紹介し、それにもかかわらず蘇詞と辛詞との間に通ずるものがあることを述べたが、それは何よりもまずこうした「率直な表現」にあり、それは周邦彥の渾厚をめざす表現手法とはおよそ對極的な位置にある。

さてそこで周邦彥の詞と姜夔、吳文英との關係であるが、周詞と吳詞の近似性については、さきの拙論「吳文英（夢窓）とその詞」（注12參照）において詳論したので多くはくり返さない。ただ吳文英のやや後輩の友人であった沈義父の、吳文英に對するつぎの評が重要な關鍵となるであろうことは擧げておかねばなるまい。

○夢窓は深く清眞の妙を得たり。其の失は事を用い語を下すこと太くりに晦き處に在り、人曉るべからず。[44]（「樂府指迷」）

この評は張炎の「詞源」に「質實なれば則ち凝澁晦昧」の例として吳文英を擧げている（後出一六二ページ）のと共通の認識を示すものであろう。そしてこれらの評が、周邦彥の詞に對して發せられた「令人不能遽窺其旨」の意に通ずることはいうまでもあるよい。吳文英の詞、特にその精粹と稱されるような作品が、周邦彥の名作と多くの共通性をもつことは右に擧げた拙論において、吳文英の代表作であり、宋詞中最大の長篇である「鶯啼序」を例として詳論した。要するに、周詞に對して發せられた、その特色を適確に指摘したような評語、右に擧げたいくつかの例のほか

○妙は說破せざるに在り、其の味わい盡くる無し。[45]（俞陛雲「宋詞選釋」）

○妙は纔し說破せんと欲して便自咽住するに在り。其の味わい正自に窮まり無し。[46]（陳廷焯「白雨齋詞話」）

のような評は、そのまま吳文英の詞に對する評としても、ほとんど異和感はない。

南宋の詞人たち、特にここでいう專業文人的な詞人たちが、しきりに周邦彥の詞の模倣を試みたことについてはかつて論じたことがある（注40參照）。中には周詞の全作品に追和しながら「依樣葫蘆（形ばかりのまねごと）」[47]と評される人もいるが、吳文英の場合は、周詞を範としたことは窺えるけれども、決して模倣に終始するものではない。周詞の內包する方向性に從って更に一歩を押し進めたと言い得るのではあるまいか。その結果、周詞に對しては發されたことのない「凝澁晦昧」もしくは「人不可曉」などの評を蒙ることにもなったのであろう。そしてこの方向においては、もはや吳文英を超える作家は出ていない。つまり吳文英の詞は、この樣式の、この方向における極限を示すものと思う。

つぎにこのような周邦彥の詞に對する吳文英の近似性を確認した上で姜夔に眼を向けるならば、先述のように姜夔は、吳文英とさまざま

な共通性を有しながら、その作品の、いわゆる「境界」についていえば、全く異質ともいい難いのであるが、多くの異質のものを含むとはいえるであろうし、少なくとも、右にみたように周邦彦と吳文英についてほとんど等質といえるのとは全く違った關係を考えざるを得ない。

本論の冒頭において、詞の理想、目標として、周邦彦か姜夔かという對立があることをしるしたが、それは主として創作の模範としてどちらを採るかという觀點からの議論であって、歷史的、文學史的觀點からすれば、活動の時期を異にするこの兩者を同一平面に並べて比べることはあまり意味がない。むしろその間の繼承關係を微細に分析することこそが重要な課題であると思う。そうした觀點からすれば、姜夔も吳文英も、周邦彦が達成した詞の世界—文學的および音樂的な洗練、更にはいわゆる「境界」を含めて、周邦彦が生み出した總合的な成果—を基盤としてみずからの文學の世界を構築しようとしたに違いない。この點は他の多くの南宋の詞人たちも同樣であり、さればこそ周邦彦は「集大成者」もしくは「正宗」と稱されるのである。しかしながら、同じく周邦彦を基盤として出發したにしても、姜夔と吳文英とでは、それぞれの達成し得た世界はひどく違ったものになっていた。さきに、周詞に對して發せられた評語を吳文英の詞にあてはめてみても、ほとんど異和感は感じられないことを述べたが、それらの評語は、姜夔の詞に對してはほとんど通用しないと思う。ひとつだけ例を擧げておこう。姜夔の代表作として、梅を詠じて范成大に贈った「暗香」・「疎影」という一組の二首を擧げるのは、ほとんど異論のないところかと思う。白石に心醉した宋末の張炎が、林逋（和靖）の梅の詩に對應する詞はこの二首しかないとし、「絕唱」と稱したばかりでなく、先述のように白石を辛棄疾の附庸として手嚴しい批判を加えた周濟すらも、この詞だけは別格ですばらしいとしている。[48] いまその第一首「暗香」を左に揭げる。

舊時の月色
算うに幾番か照らせし我の
梅の邊りに笛を吹きしを
玉人を喚起し
清寒に管らず與に攀摘せしむ
何遜も而今や漸く老い
都べて春風の詞筆を忘却せり
但だ怪み得たり　竹外の疎らなる花の
香冷かにして瑤席に入るを

江べの國
正に寂寂たり
歎ずらく　寄與せん路は遙かに
夜雪初し積る
翠樽泣り易く
紅萼言　無く　耿として相憶う
長えに記す　曾て手を携えし處
千樹　西湖の寒たき碧を壓せしを
又た片片として吹き盡くしぬれば
幾時か見得ん[50]

この詞、決して「令人不能遽窺其旨」とか、「驟視之、幾莫測其用筆之意」とかいう評は當るまい。梅の花に因んで思いめぐらすことこ

とをむしろ淡淡と述べ、それが梅自體のもつ清楚な氣品と融合して、えもいわれぬ詩境を展開する。その佳境を生み出す表現手法についても、さきに周詞について紹介した「沈鬱頓挫」もしくは「纖欲說破、便自咽住」あるいは「妙在不說破」というのとはおよそ質を異にする。

沈義父の「樂府指迷」では、詠物の詞にはテーマの文字を直接出してはならぬことをいい、（詠物詞は最も題字を說き出すを忌む云云）、周邦彥をその例に擧げているが、この白石詞ははじめにすでに「梅邊吹笛」とある。つまり「說破」「不說破」ということを持ちこめばむしろ「說破」の方になってしまうが、かといって、さきに擧げた蘇軾や辛棄疾のような直敍の體とも違うことは一讀して明らかであろう。

ついでながら「樂府指迷」の右の一條は、別の所で「如えば桃を說くに直ちに桃を說破すべからず、須らく紅雨、劉郎等の字を用うべし云云」とあるのと相應ずるもので、「四庫提要」において「確論に非ず」としりぞけられている。南宋の詞がひたすらに表現の洗練を求めた結果、一部にはこのようなマナリズムに陷ることにもなったのである。

要するに詠物の詞において、直ちにテーマの文字を「說破」するかしないかがその詞のできばえを決定するはずはなく、この詞の場合も沈義父の主張にかかわらず「豈に其の佳なるを害せんや」（毛先舒）というべきであろう。しかしながら、その佳なる所以は、周邦彥の詞に對していわれる「妙在不說破、其味不盡」などと異なることも明らかで、吳文英が周詞の內包する方向性をそのままに押し進めたとするならば、白石は周詞の成就を基盤としつつも、方向を轉換し、別に新生面を拓いたといえよう。

張炎は詞は「清空」でなければならぬとして姜夔を例に擧げ、その對立概念として「質實」、その例として吳文英を擧げた。

○詞は清空ならんことを要し、質實なるを要せず。清空なれば則ち古雅峭拔、質實なれば則ち凝澁晦昧なり。姜白石の詞は野雲孤飛して、去留跡無きが如し。吳夢窓の詞は七寶の樓臺の如く、人の眼目を眩すも、碎拆し下し來れば、片段を成さず。此れ清空質實の說なり。（張炎「詞源」）

中國の詩論、詞論の常として、そこには體系的、分析的な議論は展開されていない。

清空―古雅峭拔―姜白石詞―如野雲孤飛、去留無跡。
質實―凝澁晦昧―吳夢窓詞―如七寶樓台、眩人眼目、碎拆下來、不成片段。

という二組の語群が示されているだけであるが、姜詞と吳詞とを味讀してこの二組の對應をみれば、少なくともいちおうの理解を得ることは難かしくないと思う。當然これに對する批判もあるが、その多くはたとえば周濟が「夢窓は生澁の處無きに非ざるも、總べて空滑なるには勝れり」と述べているように、それぞれの特色のとらえ方が見當違いだというのではなく、いずれをよしとするかについての見解の相違なのである。

なお「詞源」の全體をよくみれば、決して吳文英の詞を全面的に認めないのではなく、基本的にはむしろ高く評價した上で、こうしたマイナス面もあるという姿勢であることを見落してはならない。更に留意すべきは、右の二組の對應において、辛棄疾ら一派の詞に對する配慮が完全に缺落していることである。「詞源」では辛棄疾の「祝英臺近」をとりあげてほめているところもあるが、これは例外とみなすべ

きで、概評としては、

○辛稼軒、劉改之（過）は豪氣の詞を作る。雅詞に非ざるなり。文章の餘暇に於て、筆墨を戲弄して長短句の詩を爲るのみ。[66]

と手酷しい。ここにはしいろうとは相手にせずといった專門家の自負のようなものが感じられる。おそらく彼にとっては、本稿でいう專業文人的詞人の作のみが論評に價するのであって、さきの「清空、質實」の說も、それを前提とした議論なのである。

しかしこのようなしいろうと相手にせず式の極端な見方は、當時においても必ずしも一般的とはいえず、後に擧げる「花菴詞選」の例などが示すように、辛詞が當時からそれなりに高い評價を得、人氣もあったということは種々の證がある。更に文學史を巨視的にみる立場からすれば、宋代文學の中に辛詞を然るべく位置づける必要があることはいうまでもない。從って張炎が辛棄疾を無視して立論している點は見なおす必要があるが、姜夔と吳文英を對置している點は充分に參考にするべきであると思う。

そこで視野をひろげて、辛棄疾を加えて考えなおすとすれば、どのような見方が成立するであろうか。さきに擧げた龍沐勛教授と並ぶ近代における詞學の宗師であり、姜白石の研究に數々の業績をもつ夏承燾教授がつぎのように述べられているのは傾聽に價する。

○南宋以後、白石一派の詞は、「蘇・辛」「柳（永）・周」兩派と鼎足にして三なり。[67]（「姜白石詞編年箋校」）

ただしこの並列のしかたは、北宋から南宋に到る間の詞風の變遷や各詞人間の影響關係など、歷史的な觀點が缺落しているように思われる。これを補うには、南宋中期の詞について辛、姜、吳の「鼎足而三」という對置を想定し、その源流として蘇・柳・周などを然るべく位置づけるという考え方をするべきであろう。

四

つぎに「辛、姜、吳」の三者鼎立を想定した上で、その間の相互關係について更に考えてみたい。辛と吳との對立はいわば兩極端のごとくであって、單純明快である。しかしその間に姜をどのように位置づけるかは、微妙な問題をいろいろ含んでいる。

さきに周邦彥の後繼者として「姜吳」とひとくくりにする考え方が有力であることを述べたが、それと全く逆の考え方も古くからある。それは冒頭において紹介した清朝中期の詞論家、周濟の說で、その「宋四家詞選」では、宋の詞人の四系列において、姜夔を辛棄疾の「附庸」（注3參照）としているのである。

そもそもこの周濟の「宋四家詞選」は、數ある宋詞の選本の中でも、極めてユニークな存在といえる。まず「四家詞選」と稱しながら、たとえばほぼ同時期に編まれた戈載の「宋七家詞選」が代表的な七詞人の作品を選んでいるのとは違って、「四家」は周邦彥、辛棄疾、王沂孫、吳文英を指すには違いないけれども、そのほかに四十六家[68]を採り上げ、右の四家の下に分屬せしめている。換言すれば、宋代の詞人五十人を採り上げて四系列に分類し、各系列の代表として右の四家を掲げるという編成であり、[69]それ自體がユニークなものであるが、更に代表として周・辛・王・吳の四家を並列したのも他に類例を見出し難い。更に他の四十六家の分屬や重點のおき方、採錄する作品の多少などにも、到る處に獨自の見解が發揮されている。

まず代表的詞人の採り上げ方についていえば、たとえばさきに觸れた戈載の「宋七家詞選」の七家とは、周邦彥、史達祖、姜夔、吳文

英、周密、王沂孫、張炎で、これは南宋の史達祖以下、本稿でいうところの專業的もしくは專門家的文人に限定して、そのトップクラス六人を並べ、その元祖的存在として北宋末の周邦彥を冠したに違いなく、その序[60]などを讀むまでもなく、顏ぶれを見ただけで選擇の基準は明白であるし、それを前提とする限り極めてよく吟味して選ばれており、高い見識を示しているといえる。それに比べると、周・辛・王・吳という四家は、周・王・吳が右の戈載の七家中の人であるのに對し、辛棄疾は戈載によって無視された、また溯っていえば張炎によって「雅詞に非るなり」と評された、官僚文人型の詞人であるから、その意味では異質のものの混在という感を拭えない。しかもそれは、昨今の選本などによく見受けるように、各派をまんべんなく採ってバランスをはかるというような考え方によるものでは決してない。はじめに引いたこの書の「目錄序論」に示されているように、みずからの詞論にもとづく、あるいは詞論の具體的表現としての選擇なのである。

つぎに各詞人の取り扱いについていえば、たとえば柳永を周邦彥の系列に屬せしめ、かつ十首を錄するという位置づけは[61]、當時としては極めて獨創的であったといえよう。當時はなお典雅な周詞に對する卑俗な柳詞というような認識が一般的であったと思われるからである。(たとえば「四庫提要」に柳詞を評して「頗る俗を以て病と爲す」というなど)。

周濟のさまざまな獨創的見解のうち、この柳永と周邦彥の間に脈絡を見出し、相當に高く評價していることは、現今よりみれば傾聽すべき卓見としてよいと思われるが[62]、そのほかには妥當であるかどうか疑問、もしくは容易には理解し難いことも少なくない。姜夔に對する取扱いもその問題點のひとつ、それも大きな問題點であると思う。

はじめに觸れたように浙西詞派の開山たる朱彝尊が姜夔を至高の存在のごとくに位置づけたのに比すれば、周濟は代表的作家の地位を與えなかったばかりか、はじめに引いた「介存齋論詞雜著」にみける論評などはほとんど貶辭に近い。その姿勢は對立する詞派の朱彝尊と異なるだけではなく、同じ常州詞派の開祖である張惠言とも違っている。張惠言は姜夔を朱彝尊のように格別の存在とはしていなけれども、その「詞選」の卷首に

○宋の詞家、號して極盛と爲す。然して張先・蘇軾・秦觀・周邦彥・辛棄疾・姜夔・王沂孫・張炎は、淵淵乎として文に其の質有り[63]。

と述べて一流の列に加えているのである。

周濟の姜夔に對する見解の獨自性は、右にみたような評價の問題、つまりトップクラスに列しなかったというばかりでなく、四家の系列において、辛棄疾系に屬させところに示されている。このことはさきに紹介したように張炎の「詞源」や戈載の「宋七家詞選」が、姜夔を重んずる一方で辛棄疾をほとんど無視しているのに比べると、ほとんど天地を逆轉したかのような違いがある。そして近代の概說書、龍沐勛「中國韻文史」、薛勵若「宋詞通論」(ともに前出)などが南宋の詞について概ね「辛派對姜吳」というような觀點に立っているところをみると、後世一般的には受け入れられていない奇矯の說のごとくである。

おそらくその爲であろう、周濟のこの說はいわば常識に對する挑戰とも見えるけれども、ほとんど空振りに終った感があり、以後の詞論にこの說をまともに論ずるものは少なく、ほとんど無視されているかのようである。

管見によるところ、吳宏一氏の「常州派詞學研究」につぎのような

言及がある。

○繆鉞「姜白石之文學批評及其作品」の中に在りて曾て說く、「白石詞の特點は卽ち江西派詩人の作詩の法を以て詞を作りしに在り」と。江西詩派は清勁を以て長を見す。故に姜夔詞も亦た長は清勁に在り（沈義父「樂府指迷」に「姜白石は清勁知音なれども、亦た未だ生硬の處有るを免れず」と）。この點、辛棄疾詞と頗か近似を爲す。所以に周濟以爲らく、「白石は稼軒より脫胎し、雄健を變じて清剛と爲し、馳驟を變じて疎宕と爲す」と。因りて「宋四家詞選」中に在りて、姜夔を把て辛棄疾の下に附屬せしむ。[64]

要するに姜詞と江西派詩法を結びつける繆鉞氏の論を媒介として姜辛の共通性を見出そうとしているのであるが、留意すべきは、姜辛の詞については、繆氏の論文の主旨はそこにないどころか、むしろまるで考え方が逆なのである。この論文の冒頭はつぎのように書き出されている。

○姜白石は南宋の重要詞人爲り。辛稼軒と風格は殊に異なりて、詞壇を平分す。南宋の諸詞人、大抵辛に入らざれば、卽ち姜に入る。此れ世人の共に知る所の者なり。[65]

從って吳氏の引用は、かなり强引な斷章取義といわねばならない。そこで、辛詞と姜詞とを直接相對せしめると、繆氏のいうように「風格殊異」というところばかりが眼につくことになるが、吳文英、そしてその直系の祖である周邦彥を導入して對比すると、おのずから共通性が浮び上ってくるように思う。周の「渾厚」と吳の「凝澁晦昧」との間に通ずるものがあることはすでに述べたが、この周・吳に對して辛と姜とはそれぞれに對蹠的であり、周濟はそこのところを强く意識したのではあるまいか。つまり反の反は正という論理で、鼎立という考え方をしなければそうならざるを得ないであろう。そもそも周濟の四家は四家の並列ではなく、はじめに引いたように序論には、「塗を碧山に問い、夢窓・稼軒を歷て、淸眞の渾化に還る」とあって、周邦彥を究極の目標とする階梯という考え方で、圖示するならばつぎの如くになる。

つまり王沂孫を入口とし、つぎに吳文英からいきなり周邦彥をめざすのではなく、いったん逆の極端の辛棄疾を歷て、そのように分化する以前の周邦彥の「渾厚」に達するというのである。その說の當否は今はおくとして、周濟の考え方—作詞の修練についての考え方はそのように解すべきかと思う。そしてこの配置を前提として姜夔の位置づけを考えるならば、辛棄疾の所に屬させるのも、ひとつの考え方ではあると思えてくる。しかしそこには相當な無理、さまざまな切り捨てがあることも確かで、けっきょく特殊な一說という地位にとどまっているのも當然かと思う。その一方、辛派に對する姜・吳というとらえ方にも多くの問題があることは先述のとおりで、けっきょくは辛・姜・吳という鼎立を考えるのが最も妥當な見方ということになるであろう。

なお周濟の姜夔に對する評價については考慮すべき問題がいくつかある。ひとつは「宋四家詞選」における位置づけで、辛棄疾を四家に列したといっても、決して周邦彥と同等においたのではないことは右に述べたとおりであるし、その一方、採錄詞數をみると、代表とする

四家は別格として（周29・辛23・吳22・王18）、その次ぎには姜夔の十一首が續き、一首二首だけの人が多數を占める中で群を拔いている。從って周濟の辛・姜に對する評價の差は表面にみえるほど大きくはないと考えられる。更に「論詞雜著」等にみえる貶辭に近い論評については、周濟が浙西詞派を常に意識せざるを得なかったことを考慮すべきであろう。つまり朱彝尊らの姜夔に對する過大ともいえる評價に對抗するためには、バランス上、發言がいささか過激になったという面があるに違いない。しかし多少割引きするにしても、姜夔を辛棄疾の「附庸」としたことは、右に述べたように無理があるというほかはない。

五

つぎに、南宋中期の詞について、辛・吳を兩極とし、姜夔にそのいずれでもない第三の地位を與える、つまりここでいう鼎立という見方―そのような、もしくはそれに近い認識が、宋人においてすでにかなり有力なものとしてあったに違いないことを指摘して結びに代える。

さきに「宋四家詞選」における各詞人の作品數を問題にしたが、一般に詩論または詞論の具體的表現としての選本において、採錄作品數はその作者に對する編者の評價をかなりな程度に反映するものと思う。たとえば「唐詩選」では杜甫、「三體詩」では杜牧の作を最も多く採っている事實は、それぞれの根底となっている詩論と無關係であるはずはない。

そこで、宋人の編定にかかる南宋の詞の選本といえば、まず黃昇の「中興以來絕妙詞選」十卷（「花菴詞選」の一、以下「黃選」という）と周密の「絕妙好詞」七卷（以下「周選」という）の二種が問題にされるべきであろう。南宋の詞について、當時の文人によって一定の見識をもって選ばれたと考えられ、しかもほぼ完全なかたちで傳存している[66]のはこの二種だけといってよい。

ただし作品數を比べるといっても、この兩者には選び方に基本的な違いがある。全體として周選の方は一人當りの作品數を押えて、できるだけ多くの人を錄しようとする方向、黃選の方は人數を押えて、一人當りの作品數をなるべく多く採ろうとする方向といえる。具體的にいえば、黃選の八十九家七百六十二首に對し、周選は一百三十二家三百八十四首（他に缺佚若干）と、作品數は約半分であるのに人數は一、五倍くらいになっている。

右のことを念頭においた上で、兩者における辛・姜・吳の作品の採錄狀況を見られたい。

	黃選		周選	
	作品數	順位	作品數	順位
辛棄疾	42	1	3	29
姜夔	34	3	13	2
吳文英	9	29	16	1

（順位はそれぞれ編者自身を除く）

右の數字をみれば、辛と吳の位置づけは兩者において完全に逆轉しており、黃昇と周密の詞に對する見方の相違が明白に表われている。黃昇が辛詞を最も多く、四十二首を採っているのは、劉克莊の作も同じく四十二首を採り、またもうひとつの「花菴詞選」＝「唐宋諸賢絕妙詞選」（北宋以前）において蘇軾の作を最も多く（三十一首）採っているのと首尾一貫しており、それは吳文英に多くの詞人のひとりという地位しか與えていないのと表裏の關係にある。周選ではちょうどその逆

であって、吳文英を首位におく一方で、辛棄疾はその他多勢の中のひとりでしかない。ちなみに辛派と呼ばれる劉克莊、張孝祥（黃選では二十四首）、陸游（同じく二十首）の周選における採錄數をみると、劉・張が四首、陸は辛棄疾と同じく三首となっており、こちらはこちらで首尾一貫していることがわかる。

興味深いのは姜夔の位置づけで、辛・吳の兩者について、黃選と周選がこれだけ明確な對立を示しているのに、姜夔はというと、周選においては吳文英に次ぐ第二位、黃選では辛棄疾・劉克莊（同數一位）に次ぐ第三位を占めている。すなわち兩者が一致してトップに次ぐ地位を與えているのである。

この事實は、さきに述べたように、南宋後期の文人たちの認識の中で姜夔の詞が辛詞とも吳詞とも違った、獨自の地位を占めていたことを示していると考えてよいであろう。

注（1）世人言詞、必稱北宋、然詞至南宋始極其工、至宋季而始極其變、姜堯章氏最爲傑出、（詞綜「發凡」）

（2）詞莫善于姜夔、宗之者張輯・盧祖皋・史達祖・吳文英・蔣捷・王沂孫・張炎・周密・陳允平・張翥・楊基、皆具夔之一體、（「黑蝶齋詩餘序」、「曝書亭集」）

（3）是爲四家、領袖一代、餘子犖犖、以方附庸、（周濟「宋四家詞選」目錄序論）

（4）問塗碧山、歷夢窓・稼軒、以還淸眞之渾化、余所望於世之爲詞人者、蓋如此、（同前）

（5）吾十年來服膺白石、而以稼軒爲外道、由今思之、可謂瞽人捫籥也、稼軒鬱勃、故情深、白石放曠、故情淺、稼軒縱橫、故才大、白石局促、故才小、（周濟「介存齋論詞雜著」）

（6）詳細は松尾肇子「『詞源』と『樂府指迷』」參照、「日本中國學會報」第三七集、一九八五。

（7）自蘇軾與柳永分道揚鑣、而詞家遂有「別派」「當行」之目。後來更分「婉約」「豪放」二派、而認「婉約」者爲正宗。（龍沐勛「中國韻文史」、拙藏は一九六四年香港版）

（8）詞體大略有二、一體婉約、一體豪放、婉約者欲其詞調蘊藉、豪放者欲其氣象恢宏、然亦存乎其人、如秦少游之作、多是婉約、蘇子瞻之作、多是豪放、大約詞體以婉約爲正、（明、張綖「詩餘圖譜」凡例附識。吳熊和「唐宋詞通論」引）

（9）大抵禪道惟在妙悟、詩道亦在妙悟、……惟悟、乃爲當行、乃爲本色、（嚴羽「滄浪詩話」）

（10）無咎云、……黃魯直間爲小詞、固高妙、然不是當行家語、乃著腔子唱好詩也。（趙令畤「侯鯖錄」八）

（11）退之以文爲詩、子瞻以詩爲詞、如敎坊雷大使之舞、雖極天下之工、要非本色、（陳師道「後山詩話」）

（12）「吳文英（夢窓）とその詞」（岡村繁敎授退官記念論集「中國詩人論」所收、汲古書院、一九八六）

（13）たとえば吳文英「古香慢」の前書きに「自度腔云云」とあり、張炎「西子妝慢」の前書きに「吳夢窓自製此曲云云」とあるなど。

（14）近世作詞者不曉音律、乃故爲豪放不羈之語、（沈義父「樂府指迷」）

（15）拙論「文人・士大夫・讀書人」（「未名」七號、一九八八）參照。

（16）夏承燾「姜石帚非姜白石辨」（「詞學季刊」一卷四號、一九三三）および楊鐵夫「夢窓詞全集箋釋」（民生印書館、一九三六）卷二、「惜紅衣」詞の箋參照。

（17）たとえば朱彝尊「魚計莊詞序」（「曝書亭集」四〇）に「在昔鄱陽姜石帚云云」とあるなど。

（18）○余嘗論近世之詩人、若范石湖之淸新、尤梁溪之平淡、陸放翁之敢

腴、蕭千巖之工致、皆余之所畏者云、（「千巖摘稿序」、「誠齋集」八一、「四部叢刊」景印日本鈔本、以下同じ）

○尤蕭范陸四詩翁。此後誰當第一功。新拜南湖爲上將、更差白石作先鋒。可憐公等俱癡絶、不見詞人到老窮。謝遣管城儂已晚、酒泉端欲乞移封。（「進退格、寄張功父・姜堯章」、「誠齋集」四一）

○十年不夢軟紅塵。惱亂閑心得我嗔。兩夜連繙約齋集、雙明再見帝城春。鶯花世界輸公等、泉石膏肓探病身。近代風騷四詩將、非君摩壘更何人。（原注）四人、范石湖、尤粲溪、蕭千岩、陸放翁、（「謝張功父送近詩集」、「誠齋集」三九）

(19) a、復州蕭公……以爲四十年作詩、始得此友、……

b、嘗所依倚、惟有張兄平甫（鎡）、其人甚賢、十年相處、情甚骨肉、而某亦竭誠盡力、憂樂同念、平甫念其困躓場屋、至欲輸資以拜爵、某辭謝不願、又欲割錫山之膏腴以養其山林無用之身、惜乎平甫下世、今惘惘然若有所失、人生百年有幾、賓主如某與平甫者復有幾、（周密「齊東野語」引「姜堯章自敍」）

(20) 白石の事蹟を整理したものとしてはつぎの諸書がある。

○陳柱「白石道人事略」、「白石道人詞箋平」所収、一九三〇。

○陳思「白石道人年譜」、「遼海叢書」所收、一九三三。

○夏承燾「姜白石繫年」、「唐宋詞人年譜」所收、一九五五。

○夏承燾「輯傳」、「姜白石詞編年箋校」附錄、一九五八。

(21) たとえば「東北大學所藏和漢書古典分類目錄、漢籍」、五五二頁。

(22) 城內園林、宋雲間洞天、錢參政良臣園、在里仁坊內、宅居其旁、廣踰數里、至今指其坊猶稱錢家府云、（陳思「白石道人年譜」引「光緒華亭縣志」）

(23) 「華亭錢參政園池」詩および「蕭山溪、題錢氏溪月」詞。

(24) 惜乎白石樂府五卷、今僅存二（三）十餘闋、（朱彝尊「詞綜發凡」、この「二」はおそらく「三」の誤まり。冒頭に汲古閣「宋名家詞」を擧げているが、名家詞本「白石詞」は三十四首を收める。）

(25) 夏氏、丘氏とも沈曾植本を張奕樞刊本の景印とみなしているが、汪世清氏はそうではないとする（「有關〈張刻白石詞〉的兩點補充」の「二」、沈曾植本並非影印張奕樞本」參照、「唐宋詞研究論文集」所收、中國語文學社、一九六九）。

(26) 丘氏は陶抄本系以外に四卷の宋本が別にあって、陸本はそれに據ったに違いないとするが（「白石道人歌曲通考」の「專論、應有宋刻四卷別集一卷本、陸刻非陶鈔辨」）、夏氏はそうではあるまいとする（「白石詩詞集」附「白石集版本小記」）。この陸鍾輝の序の書き方からいって、丘說はやはり無理であろう。

(27) 吳世昌教授は一九八二年、中國社會科學院代表團の一員として來日の際の講演（「詞學に關する諸問題」）においてこの說を發表され、歸國後「有關蘇詞的若干問題」（「文學遺產」一九八三年第二期）および「宋詞中的〝豪放派〟和〝婉約派〟」（「文史知識」一九八三年第九期）という二篇の論文を公表された。

(28) 世言稼軒居士辛公之詞似東坡、非有意於學坡也、自其發於所蓄者言之、則不能不坡若也、（范開「稼軒詞序」）

(29) 右の序には「開久從公遊、……因暇日裒集冥搜、才逾百首、皆親得於公者、云云」とあり、末尾に「門人范開」と自稱し、「淳熙戊申（十五年、一一八八）」の日付がある。この前後、辛棄疾はずっと江西上饒に隱棲していた。

(30) たとえば、薛勵若「宋詞通論」（拙藏は一九六〇年香港版）では「宋詞第五期」を三章に分ち、第一章、風雅派（或古典派）的三大導師（姜夔、史達祖、吳文英）、第二章、一般附庸作家、第三章、辛派詞人とする。

(31) 天津教育出版社、一九八九。

(32) 浙江古籍出版社、一九八五。第四章、第九節、辛棄疾與南宋愛國詞。

第十節、姜夔句琢字煉、歸于醇雅。第十一節、眩人眼目的吳文英詞。

(33) 清眞之詞、其意澹遠、其氣渾厚、其音節又復清姸和雅、最爲詞家正宗、(戈載「宋七家詞選序」)

(34) 求之兩宋、惟片玉梅溪足以備之、周之勝史、則又在渾之一字、詞至於渾而無可復進矣、(馮煦「宋六十一家詞選例言」)

(35) 柳陰直。煙裊絲絲弄碧。隋堤上曾見幾番、拂水飄綿送行色。登臨望故國。誰識。京華倦客。長亭路年去歲來、應折柔條過千尺。 閑尋舊跡、又酒趁哀絃、燈照離席。梨花榆火催寒食。愁一箭風快、半篙波暖、回頭迢遞便數驛。望人在天北。 悽惻。恨堆積。漸別浦縈回、津堠岑寂。斜陽冉冉春無極。念月榭携手、露橋聞笛。沈恩前事、似夢裏、淚暗滴。(周邦彥「蘭陵王、柳」)

(36) 驟視之、幾莫測其用筆之意。(吳梅「詞學通論」)

(37) a、令人不能遽窺其旨。……b、大抵美成詞、一篇皆有一篇之旨、尋得其旨、不難迎刃而解、否則病其繁碎重複、何足以知清眞也、(陳廷焯「白雨齋詞話」)

(38) 託柳寄興、非詠柳也、(陳洵「海綃說詞」)

(39) 客中送客。一愁字代行者說想。(周濟「宋四家詞選」眉批)

(40) 拙論「周美成の詞について」(「東北大學敎養部紀要」19號、一九七四)または「宋詞研究、唐五代北宋篇」(創文社、一九七六)の「周美成詞論」參照。

(41) 壯歲旌旗擁萬夫。錦襜突騎渡江初。燕兵夜娖銀胡觮、漢箭朝飛金僕姑。 追往事、歎今吾。春風不染白髭鬚。都將萬字平戎策、換得東家種樹書。(辛棄疾「鷓鴣天、有客慨然談功名、因追念少年時事、戲作」)

(42) 邊牀飢鼠。蝙蝠翻燈舞。屋上松風吹急雨。破紙窓間自語。 平生塞北江南。歸來華髮蒼顏。布被秋宵夢覺、眼前萬里江山。(辛棄疾「清平樂、獨宿博山王氏菴」)

(43) 簌簌衣巾落棗花。村南村北響繰車。半依古柳賣黃瓜。 酒困路長惟欲睡、日高人渴漫思茶。敲門試問野人家。(蘇軾「浣溪沙、徐門石潭謝雨道上作」)

(44) 夢窓深得清眞之妙、其失在用事下語太晦處、人不可曉、(沈義父「樂府指迷」)

(45) 妙在不說破、其味無盡、(俞陛雲「宋詞選釋」)

(46) 妙在纔欲說破、便自咽住、其味正自無窮、(陳廷焯「白雨齋詞話」)

(47) 饒宗頤「詞籍考」における方千里「和清眞詞」に對する評。(同書一八三頁)

(48) 詞之賦梅、惟和靖(林逋)一聯而已、世非無詩、不能與之齊軀耳、詞之賦梅、惟姜白石暗香疎影二曲、前無古人、後無來者、自立新意、眞爲絕唱、太白云、眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭、誠哉是言也、(張炎「詞源」雜論)

(49) ……稼軒縱橫、故才大、白石局促、故才小、惟暗香疎影二詞、寄意題外、包蘊無窮、可與稼軒伯仲、(周濟「介存齋論詞雜著」)

(50) 舊時月色。算幾番照我、梅邊吹笛。喚起玉人、不關清寒與攀摘。何遜而今漸老、都忘却春風詞筆。但怪得竹外疎花、香冷入瑤席。 江國。正寂寂。歎寄與路遙、夜雪初積。翠樽易泣、紅萼無言耿相憶。長記曾携手處、千樹壓西湖寒碧。又片片吹盡也、幾時見得。(姜夔「暗香」)

(51) 詠物詞最忌說出題字、如清眞梨花及柳、何曾說出一箇梨柳字、(沈義父「樂府指迷」)

なおこの條、さきに擧げた周邦彥「蘭陵王」の冒頭に「柳陰直」とあるのと矛盾するが、沈義父はこの詞を詠物とはみなしていなかったのであろう。

(52) 又謂說桃須用紅雨劉郎等字、說柳須用章臺灞岸等字、說書須用銀鉤等字、說淚須用玉筯等字、說髮須用綠雲等字、說簟須用湘竹等字、不可直說破、其意欲避鄙俗、而不知轉成塗飾、亦非確論、(「四庫全書總目提要」一九九、詞曲類二、「沈氏樂府指迷」)

(53) 沈伯時樂府指迷、論塡詞詠物、不宜說出題字、余謂此說雖是、然作啞謎亦可憎、須令在神情離卽間乃佳、姜夔暗香詠梅云、算幾番照我、梅邊吹笛、豈害其佳、(毛先舒、蔡嵩雲「樂府指迷箋釋」引)

(54) 詞要清空、不要質實、清空則古雅峭拔、質實則凝澁晦昧、姜白石詞如野雲孤飛、去留無跡、吳夢窗詞如七寶樓臺、眩人眼目、碎拆下來、不成片段、此清空質實之說、(張炎「詞源」清空)

(55) 夢窗非無生澁處、總勝空滑、(周濟「介存齋論詞雜著」)

(56) 辛稼軒劉改之作豪氣詞、非雅詞也、於文章餘暇、戲弄筆墨、爲長短句之詩耳、(張炎「詞源」雜論)

(57) ……這是白石詞風格的一斑、這不但是溫・韋・柳・周所沒有的、也和蘇・辛一派不同、可說是白石的特色。……南宋以後、白石這派詞和「蘇・辛」「柳・周」兩派鼎足而三。(夏承燾「姜白石詞箋年箋校」卷首「論姜白石詞」)

(58) 末尾に無名氏の「綠意」一首があるが、實は張炎の作で(「山中白雲詞」六に「紅情」とペアになってみえている)、「四十六家」の數は動かない。

(59) 「目錄」のあとには「右宋詞若干首、別爲四家、以周辛王吳爲之冠」とある。

(60) 卷首王敬之の序に「今所選七家詞、蓋雅音之極則也、律不乖迕、韻不厖雜、句擇精工、篇取完善、云云」とある。

(61) 本書において十首というのは、四十六家のうちでは姜夔の十一首に次ぐ。

(62) 拙著「宋詞研究」(注42參照)の「柳耆卿詞論」および「周美成詞論」、を參照されたい。

(63) 宋之詞家、號爲極盛、然張先・蘇軾・秦觀・周邦彥・辛棄疾・姜夔・王沂孫・張炎、淵淵乎文有其質焉、(張惠言「詞選」敍)

(64) 繆鉞在「姜白石之文學及其作品」中、曾說：「白石詞之特點、卽在以江西派詩人作詩之法作詞。」江西詩派以清勁見長、故姜夔詞亦長在清勁(沈義父「樂府指迷」……「姜白石清勁知音、亦未免有生硬處。」)這點和辛棄疾詞頗爲近似、所以周濟以爲「白石脫胎稼軒、變雄健爲清剛、變馳驟爲疏宕」、因而在「宋四家詞選」中把姜夔附屬於辛棄疾之下。(吳宏一「常州派詞學研究」、臺新水泥公司文化基金會、一九七〇年)

なおこのほかさきに擧げた吳熊和氏「唐宋詞通論」(注32參照)では姜夔を論じた第十節に周濟の說を紹介しているが、「通論」という性格からであろう、立ち入った議論は展開されていない。

(65) 姜白石爲南宋重要詞人、與辛稼軒風格殊異、而平分詞壇、南宋諸詞人、大抵不入於辛、卽入於姜、此世人所共知者、(繆鉞「姜白石之文學批評及其作品」、「詩詞散論」所收、開明書店、一九四八)

(66) 「絕妙好詞」の卷四、施岳の「清平樂」は前闋のみを存し、「原本云、此下缺六首」と注があるので完璧とはいえない(臺灣商務印書館「四部叢刊三編」景印雍正項絪刊本。上海古籍出版社景印道光本「絕妙好詞箋」も同じ)。「中興以來絕妙詞選」は汲古閣「詞苑英華」本、陶氏涉園景刊宋本、「四部叢刊」景印明繙宋本などがあって、みな十卷の內容に異同はなく、足本であることはまちがいない。